



ARTRAMBLE

学芸員の視点 ②③
コシノヒロコ展 — 鈴木慈子

特別寄稿 ④⑤
呉昌碩と日本 — 味岡義人

ショート・エッセイ ⑥
伝世品の魅力
— 小企画「せいのこ 頼川コレクション・梅舒適コレクション
受贈記念展」によせて — 柏木知子

トピックス ⑦
「コシノヒロコ展」関連事業
千宗屋氏講演会
常設展示室6のリニューアル

美術館の周縁 ⑧
「視覚に頼らない鑑賞サポートツール」
製作検討会に参加して — 江上ゆか

コレクションから

肩衝茶入としては、胴が細身で背が高く見える姿からその名があり、字は「せいたか 勢高」を当てます。釉調は総体に黒鉛釉で、火災に遭って「焼け物」となったため補色や漆の繕いが見られますが、変わらぬ品格が漂います。

『津田宗及茶湯日記』に「かたつき、高き肩つき也、二筋のなだれのあいこ、あかき色染有之、口作薄く候也、捻返し少しあり、肩にかかりたる葉、面の方は黒く、裏は下の色うすく候也（大略）」とあり、永禄10年（1567）、宗及が堺の豪商・住吉屋山岡宗無の茶会へ招かれた折の実見記が知られます。宗無のあと織田信長の所持となり、本能寺で罹災したと伝わります。のちに豊田秀吉、

古田織部を経て、徳川家康が所持し、4代將軍家綱のときに明暦の江戸大火（1657年）で再び火中しますが、奇跡的に救い出されました。

茶道具は、物自体の価値はもとより、その来歴を尊びます。本品は、大名物の名にふさわしい伝来を有する茶人垂涎の茶器で、朱座裂、白茶広東の仕覆、唐物内朱縁燕口の四方盆、千宗旦（宗受宛）書状他の付属品を伴い、時代を超えて愛玩されてきたことがわかります。

（柏木知子／当館学芸員）



《肩衝茶入 銘 勢高》大名物
南宋時代（13世紀）
高8.8 口径4.2 底径4.2cm
1口
重要美術品
頼川コレクション

コシノヒロコ展

鈴木慈子



図1 「フワフワ」

「コシノヒロコ展—HIROKO KOSHINO EX・VISION TO THE FUTURE 未来へ」は、困難な時代を生き抜いて、今も活躍を続ける国際的なファッションデザイナー、コシノヒロコの作品を、これまでにない規模で紹介する展覧会だ。本展のタイトル「エクスヴィジョン ex-vision」は造語で、展覧会＝エキシビジョンにちなみ、コシノヒロコの想像力や心に描く未来像を、外に示すという思いがこめられている。展覧会は、オノマトベ（擬音語・擬態語）が付された14のセクションに分かれている。日本語は世界的に見て、とくにオノマトベが豊かな言語と言われる。ことばの持つ愉快な響きが、来場者をコシノワールドへと誘う。

最初に人々を迎えるのは、全長5メートルを超えるヒロコちゃんバルーンで、オノマトベは「フワフワ」（図1）である。当館の屋上の上っている「美かえる」のバルーン製作を担当した会社が、アクセサリや爪などの細部にまでこだわって完成させた。続くセクションは「ベチャクチャ」（図2）。コシノはこれまで45年にわたって、毎年2回、新作を世に送り出してきた。歴代コレクションから厳選された20着が、安藤忠雄設計の大階段に並ぶ。マネキンはすべてコシノと同じお団子頭、うち2体はロボットで、ゆっくりと首や手が動く。

展覧会では、ファッションだけでなく、絵画制作も取り上げている。3歳の頃に祖父と見た歌舞伎は、コシノの未来を変えような出会いだった。また自らの原点を、母が買ってくれた画材・パステルだったと語る。色鮮やかな世界に魅せられ、弾む心を、コシノはずっと大切にしてきた。小さいとき画家になりたかったコシノは、いま、ファッションで成功したヒロコが、絵描きのヒロコをサポートしていると言う。絵画があるからこそ、ファッションの感覚的な部分が研ぎ澄まされる。絵画は、洋服のインスピレーション源になり、新しいかたちの発見へとつながり、自分らしさを引き出せる。コシノは、絵を描かないで洋服だけに専念していたら、こういった洋服は作ってられないのではないかと述べる。

3階の展示室に入るとすぐ、今年で84歳になったコシノのこれまでのを、貴重な写真とゆかりの品々でたどる「人生オノマトベ84」がある。続く「ルルルン」というセクションでは、色とりどりの絵画と、それらと関わりのある洋服を組み合わせている。次の「ビュー」でも洋服と絵画を合わせて展示するが、室内の雰囲気は一変し、モノクロームの世界が広がる。墨による小品は、一点一点独立した作品ながら、集めた様子を、全体として鑑賞することもできる。コシノは自らの絵画を「インテリア」であると語り、絵画とそれが置かれる空間に対する意識が、展示構成から感じられる。

当館の企画展示室は、天井高7.2メートルの2室と、天井高がその半分の1室、合計3室からなる。天井の高い部屋から低い部屋に移動し、最初にあらわれるセクションが「ニョキニョキ」。色とりどりのタイツをまとった300本のマネキンの脚が、ニョキニョキと壁から突き出している。このイメージ自体はコシノがずっ

と持ち続けていたもので、準備期間には、実際にどうやって脚を固定するか、コシノのヴィジョンをいかに具現化するかという方法の模索が続いた。体操競技日本代表のユニフォームを展示する「クルリンパツ」では、胸元の意匠を壁に大きく拡大している。いずれのセクションも、あてられたスペースこそ狭いものの、強烈な印象を残す。

若い世代のアーティストとのコラボレーションは、この展覧会の重要な一角を占める。「きらきら」というセクションでは、アートユニット・サークルサイドとタッグを組んでいる（図3）。プロジェクションマッピングによる光のきらめきが、洋服の新たな魅力を引き出す。2着の「ペーパードレス」は、かたちは幾何学的だが、素材は紙で、有機的なものである。サークルサイドが周りに配置したオブジェも、一見すると、針金でできているようだが、麻糸が用いられている。無機的なのに有機的。洋服のコンセプトとサークルサイドの演出は一致している。その後「チカチカ」という錯視的イメージの部屋を挟み、コシノの絵画とエトリケンジによるワイヤーネットフィギュア7体（うち3体は本展のために制作された新作）が共演する「ヒラヒラ」、コシノの絵画をもとにした映像作品「ピョン」が続く。「ピョン」では、この展覧会に向けてデンキトンボが制作した4Kのクリアな映像が、壁4面に投影されている。来場者は絵の中にピョンと入りこみ、不思議な3人（頭が鳥で、傘をさしている）とともに絵画の世界を探検する。

再び天井の高い部屋に入り、最初の「ピョーンギュット」というセクションには、ふたつの要素がある。「ギュット」はコシノならではの洋服の見せ方で、70cm×70cmのアクリルケースに洋服やアクセサリ類をギュットと詰め込んだ「衣の中に見る絵画」である。制作に際しては、神戸芸術工科大学の学生38名が参加した。200点近くの洋服を渡された学生たちは、個人やグループで洋服を選び、絵画のように見えるよう、ケースの中におさめた。もうひとつの「ピョーン」では、洋服の意匠の一部を7メートルのタペストリーに拡大し、その前にマネキンを一体ずつ配置している。

タペストリーの向こう側に広がる「ワクワドキドキ」と題されたセクションでは、コレクション作品から選ばれた106体が一堂に会する（図4）。それらが奏でる交響曲は、デザイナーのヴィジョンだけでなく、制作の一翼を担う作り手たちの情熱を伝える。ランウェイを通り過ぎていくコレクション発表時とは異なり、正面も側面も背面も、細部まで観察することができ、妙技を間近に感じられる。コシノは、倉庫で保管している約2,000着の中から作品を厳選し、さらにアクセサリや靴などの組み合わせを新たに考え、コーディネートしなおした。出展する洋服は、今に通じるものだけを選んだと言う。この展示は、コレクションの歴史、アーカイブにとどまらない、彼女の現在を示すものでもある。

「ワクワドキドキ」は本展のハイライトであるが、展示はこれで終わりではな



図2 「ベチャクチャ」

い。会場を出たすぐの回廊に、「スクスクスクス」というセクションを設け、幼稚園の園児たちが描いた「笑顔」を並べた。子どもたちは黒で絵を描き、コシノが監修して色をつけている。展覧会タイトルにある「TO THE FUTURE 未来へ」というコンセプトが、この笑顔のリレーにも宿っている。本展は、コシノの魅力を探る場であるとともに、次世代の子どもたちへ手渡すバトンでもあるのだ。

コシノヒロコは1937年、大阪の岸和田に生まれ、現在は芦屋に暮らしている。1981年から30年以上暮らした自宅（現在はKHギャラリー芦屋）は、安藤忠雄の設計である。コンクリート打ちっばなしの、グレーの空間の中で、コシノは創作活動を続けてきた。このたびの展覧会が、同じく安藤忠雄が設計した兵庫県立美術館で開かれたことは、大きな意味をもっている。

音楽にたとえるならば、今回のコシノヒロコ展は、提示部と展開部、再現部をもつ「ソナタ形式」である。繰り返し登場するのは、いずれもファッションデザイナーとしてのコシノの仕事であり、安藤忠雄設計の建築空間に対する挑戦である。

特別展の会場は通常、企画展示棟3階の展示室のみであることが多いが、本展では3階に到着するまでに、ふたつのセクション「フワフワ」「ベチャクチャ」を設けている。1階から2階に通じる階段は、コンクリートと鉄とガラスに囲まれ、自然光も感じられる吹き抜ける空間である。空中に浮かぶバルーンは、最初に来場者をあっと驚かせる仕掛けにもなっている。2階から3階へと通じる大階段は、天井が高く、広く、灰色という安藤建築の特徴をよく備え、ここを舞台とするのが、コシノのファッションの粋を集めた提示部「ベチャクチャ」である。

洋服と絵画との融合、他作家とのコラボレーションといった展開部を経て、「ワクワドキドキ」が再現部にあたる。コレクション作品の数は、最初の大階段（「ベチャクチャ」は20体）の5倍以上（106体）。仮設された階段に立ち並ぶマネキンたちは、オーケストラにも合唱隊にも見え、群としての迫力を見る者を圧倒する。最後に、終奏の「スクスクスクス」で、コンクリートと鉄とガラスに囲まれた、自然光の差し込む空間へと戻っていく。コシノの作品と安藤建築との関係性は、展覧会を貫くテーマと言えよう。

展覧会への入場者も、各イベントの参加者も、制約があり数を限定せざるを得なかったが、それでも多くの方々に来場いただいた。展覧会場の設営に関わった職人（大工、塗装、経師など）、マネキンの専門業者、洋服の着せ付けを行ったモデリスト（パタンナー）…挙げればきりがなが、それぞれの熟練の技術が発揮され、展示は無事できあがった。会期中に開催したトークショーでも、ファッションショーでも、一流の職業人が集った。

本展を支えたのは、リアルな体験でしか得られないものがある、というコシノヒロコの信念ではなかったか。コシノは、展覧会を見て元気になってもらいたい、とも言っていた。制約をこえる原動力となったのは、彼女自身のプロ意識に他ならない。本物の力を信じる精神と行動力、この展覧会に携わったすべての方々の、プロフェッショナルな仕事に対し、感謝と尊敬の念を捧げたいと思う。

（文中敬称略）

（すずき・よしこ／当館学芸員）

特別展「コシノヒロコ展—HIROKO KOSHINO EX・VISION TO THE FUTURE 未来へ」は、4月8日から6月20日まで開催。



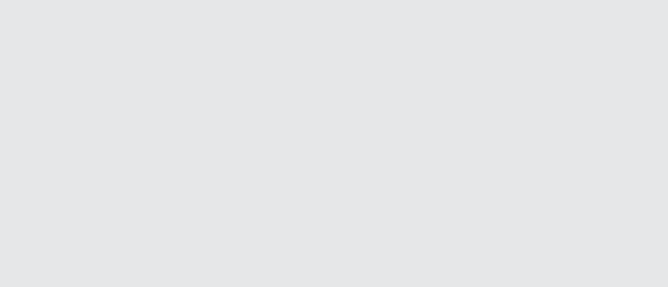
図3 「きらきら」



図4 「ワクワドキドキ」

呉昌碩と日本

味岡義人



呉昌碩（1864年12月1日 - 1927年5月16日）

呉昌碩（1844～1927）は、清末から民国初にかけての上海を中心に活躍した画家の総称である海上派を代表する人物であり、書法・篆刻・詩にも優れ清朝最後の文人と称された。そして、明治中葉から昭和初頭にかけて、日本で最も知られた同時代の中国の芸術家であり、今日でも我が国の書家達に最も敬仰されている中国の書家の一人である。それ故に日本国内における呉昌碩作品の数は極めて多い。呉昌碩の生誕160周年を記念して編集された『日本蔵呉昌碩金石書画精選』（西泠印社出版社、2004年）には日本にある呉昌碩作品は2500件に及ぶと記される。同書には386件の作品が収録されるが、それらは全て個人の所蔵品である。書家の故青山杉雨氏、中国絵画の蒐集家である故橋本末吉氏の蒐集された作品と並んで同書の中核となっているのが日本書芸院理事長、西泠印社名誉理事を務めた関西書壇の重鎮・故梅舒適氏の所蔵品である。青山氏の所蔵品と同じく、梅氏の所蔵品も、自らの創作の為の資料として蒐集されたものであり、梅氏の作品理解の一助ともなる。呉昌碩の書画篆刻作品や関連資料など総数約150件が一括して兵庫県立美術館に寄贈されたことは、同館が日本有数の呉昌碩作品所蔵館となったことを意味しているといえよう。

ところで、呉昌碩がどのような経緯で2500件以上の作品が所蔵されるほどに日本で愛好されるに至ったのであろうか。

東京の小田急線豪徳寺駅の駅名の由来になっている豪徳寺は招き猫発生の寺とされ、彦根藩井伊家の菩提寺で幕末の大老井伊直弼の墓があることでも知られる。井伊家ゆかりの人の墓も多く、その中に書家日下部鳴鶴の墓がある。鳴鶴の墓銘を記したのが呉昌碩であり、鳴鶴こそが、最初に呉昌碩の名を日本に知らしめた人といえよう。

日下部鳴鶴（1838～1922）は彦根藩土田中家の次子として生まれた。名は東作、後に同じ彦根藩士日下部家の養子となる。維新後は新政府に仕えて内閣大書記官となるが、仕えていた大久保利通の遭難を機に官を辞し、書道に専念していった。ちなみに東京・青山墓地にある大久保利通の神道碑銘は鳴鶴の傑作と言われている。書は初め貫名菘翁を学び、明治13年（1880）、清国公使の随員として来日していた金石学者楊守敬に師事して碑学、六朝の書、篆隸を学んだ。明治24年（1891）には清国に渡り、金石碑文の研究を深め、同時に金石学者として知られる呉大澂（1835～1902）、隸書の大家楊岷（1819～1896）など多くの文人と交わり見識を深めていった。帰国後は、六朝書道を基礎に独自の書風を樹立し、それまでの和様から唐様に日本の書法の基準を作り変え、近代書道を確立した。鳴鶴が交わった文人の一人に、呉大澂や楊岷と

も関わりの深い呉昌碩がいた。この時、鳴鶴54歳、呉昌碩は6歳下の48歳であり、呉昌碩は鳴鶴のために「日下東作」と「子陽（鳴鶴の字）」の二印を刻して贈った。以後、鳴鶴が歿するまでの三十年間、二人は忘年の交を結び、呉昌碩からは刻印や書がしばしば鳴鶴のもとに贈られ、そして、鳴鶴は門人の山本竟山を呉昌碩の下に送り学ばせるなどした。鳴鶴の門流は鶴流と称され、門人三千を数えたといい、呉昌碩の名は彼らを通して世に広まっていったと考えられる。

呉昌碩の書「日下東作」

明治4年（1871）の日清修好条規調印後から昭和の初めまで、一旗揚げんとする者から渴仰していた中国の文化に直接触れることを願った文化人など多くの日本人が中国に渡った。一旗組の中に、上海で日本式料亭を営んだ白石六三郎（1868～1934）がいる。光緒26年（1900）に上海に料亭六三亭を開いた白石は、支店として34年（1908）に6000坪の敷地を購入して日本式庭園を備えた六三園を開き、以後、六三園は上海在住の日本人は勿論、中国を訪れる日本人が多く訪れ、また、呉昌碩の門人で日清汽船の社長などを務めた王一亭をはじめとする中国の文化人や政財界の要人と日本人の交流の場となった。呉昌碩もしばしばここを訪れている。民国3年（1914）にはこの六三園で呉昌碩の個展が開かれ、以後、呉昌碩に書画の揮毫を依頼する日本人が後を絶たなかったという。梅氏の収蔵品の中にも、安藤某の喜寿を祝して書いた「篆書寿字軸」（1919）、金谷某の依頼による「篆書六言額」（1923）、上田某の依頼による「篆書望白横披」（1925）、神津某の依頼による「玉蘭図軸」（1916）、権野某の依頼による「墨梅図」（1925）などの日本人と思われる為書のある作品がある。この時、潤例（価格表）に従って代金が支払われたと考えられる。呉昌碩歿後、三周忌の追悼会が六三園で催されたが、その発起人として、王一亭、王賢などの門人、上海の芸壇と深い関わりがあった三井銀行上海支店長の土屋計左右と並んで白石が名を連ねている。なお、この会の告知も梅氏の所蔵品に含まれている。

一方、中国の文化に直接触れることを願った文化人たちの中に、鳴鶴がいたのであり、篆刻家の河井荃廬、円山大迂、桑名鉄城、書家の北方心泉などが鳴鶴に前後して呉昌碩のもとを訪れ、交わりを結び師事している。中でも、呉昌碩との関係が深く、しばしば呉昌碩作品の箱書をしてがけ、学術的な面でも呉昌碩の名を高めたのが漢学者長尾雨山であった。雨山もまた六三園の常連であった。長尾雨山（1864～1942）は名を甲といい、幼時から漢学を父について学び、東京帝国大学卒業後には第五高等学校、東京高等師範学校などで教鞭をとった。五高時代には同僚の夏目漱石と漢詩文を通して親しく交わっている。



日下部鳴鶴の墓（世田谷区豪徳寺）

梅舒適の書「日下東作」

疑獄に関わり官を辞して、明治36年（1903）に上海に渡り、商務印書館の顧問に就任した。上海にいた12年間、多くの文人たちと交流、その漢学的教養と書は彼らに高く評価されたという。民国元年（1911）、呉昌碩は蘇州から上海に移り、翌年、雨山の居宅近くに居を定めた。以後の三年間、二人は親交を深め、呉昌碩は雨山を河井荃廬とともに篆刻の結社西泠印社同人に招き、愛蔵の「長生未央磚」の拓本に詩を添えて贈り、或いは民国4年（1914）に雨山が帰日するに際し陸恢が描いた「海浜話別詩画卷」（京都国立博物館蔵）に題を書し、鄭孝胥とともに詩を作って送るなどしている（後に李瑞清も詩を書し合装された）。帰国後も二人の交誼は続き、呉昌碩からはしばしば書や詩、刻印がもたらされた。例えば、京都国立博物館所蔵の「行書寿蘇詩」は、雨山が宋代の文人蘇軾の誕辰を祝して大正8年（1919）に開いた雅集である「寿蘇会」のために贈ったものである。この会には多くの文人名士が参加しており、彼らが呉昌碩を認識する格好の機会となったと思われる。

呉昌碩の書「日下東作」

呉昌碩の日本における人気を後押しし、また牽引したのが明治44年（1911）に大阪心齋橋店に設立された高島屋美術部で、富岡鉄斎、横山大観、下村観山などの個展を開き、大正期の美術市場において主導的役割を果たした存在であった。

高島屋美術部が呉昌碩を紹介したのは大正6年（1917）に『呉昌碩画贖』を刊行したのが最初といい、その後、10年（1921）の「現代名家南宗画幅展覧」に数点の呉昌碩作品が出品されたという。そして、11年（1922）に大阪店で、高島屋の依頼で制作された新作48件による日本で初めての個展「呉昌碩書画新作展」が開催され、あわせて『缶翁墨戯』と題する画集が刊行された。同書には富岡鉄斎が題字、長尾雨山が序文を寄せている。呉昌碩の個展の後には王一亭の個展も開かれている。翌年、関東大震災が発生するが、この時、王一亭を中心に書画展を開き日本への義捐金をつのって送り、また、国技館近くの震災記念堂にはこの時に王一亭が贈った鎮魂の鐘が掛けられてもいる。その後、13年（1924）に「西湖に関する書画展覧会」に日中の書画家49名の一人として2点の作品が出品され、15年（1926）に大阪・東京の二店で2回目の個展「呉昌碩先生新作書画展覧」に52件の新作が出品され、『缶廬近墨』（缶廬は呉昌碩の号の一）と題する画集が刊行された。同書には橋本閑雪、そして呉昌碩自ら題字を書し、雨山が再び序文を記している。そして、昭和2年（1927）に開催された「王一亭近作書画展」では王一亭の作画に呉昌碩が賛を書し「王画呉題」として好評を博したという。この年に呉昌碩が亡くなると、翌3年（1928）に大阪・東京で「呉昌碩遺墨展」を開催し、『缶翁遺墨紀念冊』が刊行された。



頼川コレクション・梅舒適コレクション受贈記念展 展示風景（春季展示）

梅舒適の書「日下東作」

こうした展覧会や画集の刊行により、呉昌碩の名は広く知られていったと考えられる。呉昌碩が亡くなるとすぐに上海特電として写真入りで「現代支那隨一の文人画家呉昌碩」の死去を報じているのはその証であろう。

呉昌碩の書「日下東作」

呉昌碩と日本人の関わりは極めて多方面にわたった。中村不折や富岡鉄斎などの書画家は勿論、洋画家の児島虎次郎や黒田清輝、西園寺公望や犬養木堂などの政治家などが書や刻印を呉昌碩に依頼している。朝倉文夫は呉昌碩の胸像を作りこの像は西泠印社に安置されている。

ただ、このように様々な分野の人たちが呉昌碩の人や作品に関心寄せたのは戦前までのことといえよう。戦後の一時期は中国との往来もままならず、一方に欧米志向といった背景もあり、書家などの一部の人たちを除いては、中国美術、特に書画への関心もうすまっていたように思われる。呉昌碩を通して、往時の日中の文化的な交流に思いをはせるとともに、詩・書・画・篆刻が一体となった中国絵画の魅力を感じてもらえればと思う。

※本稿を記すにあたって、松村茂樹氏の『呉昌碩研究』（研文出版、2009年）を参照させていただきました。

（あじおか・よしんど／元渋谷区立松清美術館上席研究員）

1950年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程満期退学。1982年より2017年まで渋谷区立松清美術館で主に中国美術・台湾美術の企画を担当。2016年よりフェリス女学院大学国際交流学部非常勤講師。著書に『中国法書ガイド 呉昌碩集』（共著、二玄社、1990年）、『中国書画探訪：関西の収蔵家とその名品』（共著、二玄社、2011年）など。



左から呉昌碩「山水図」、「玉蘭図」、「篆書寿字」（春季展示）

伝世品の魅力

— 小企画「えがわ 穎川コレクション・ばいじよてき 梅舒適コレクション受贈記念展」 — によせて —

柏木知子

ショート・エッセイ

当館常設展示室6において、4月24日から7月4日までの会期中、2019年に兵庫県が受贈した2つのコレクションを披露する記念展を開催した。

穎川コレクションは、大阪の実業家・穎川徳助（1899～1976）の収集による日本美術を中心としたコレクションで、その過半は1973年に開館した穎川美術館（西宮市上甲東園）に継承された。同館が2019年3月末をもって閉館したことに伴い、重要文化財4件、重要美術品4件を含む約250件の美術品等が、当館の所蔵に帰した。

一方、梅舒適コレクションは、わが国を代表する篆刻家・梅舒適（1916～2008）が、約60年にわたる歳月をかけて収集した文物で、中国近世・近代書画、文房具、典籍ならびに梅舒適自身の書画・篆刻作品等を、ご遺族よりご寄贈いただいた。これらのうち、今回は、質量ともに日本有数を誇る呉昌碩（1844～1927）の作品に焦点をあて、展示を行った。詩・書・画・篆刻に精通し、近代中国でもっとも優れた芸術家とされる呉昌碩は、存命中から日中の書画家の尊崇を集め、今なお熱烈な愛好者がいることで知られている。

受贈記念展という性質上、優品や資料的価値の高いとされる作品を選びすぐり展示することが主眼となったが、そうしたなかで存在感を放ったのは、古くから世に愛玩されて伝えられてきたもの、すなわち伝世品であった。美術品はこの世に創出されてより、長い歴史のなかで所有者を変え、今日までその姿を伝えている。両コレクションの作品・資料も、それぞれに来歴があり、足跡を辿ることは、評価を知る重要な手がかりとなる。

《肩衝茶入 銘 勢高》（穎川コレクション）は、信長、秀吉、家康等の名だたる武将や茶人を渡り歩いた来歴を持ち、柳営御物（徳川將軍家の所蔵品）となってからも愛蔵されていたことは、本号表紙「コレクションから」で紹介したが、この茶器には、さらなる流転の歴史が展開される。8代將軍吉宗のときに本多忠統（猗蘭侯）に下賜され、その後、神戸本多家に伝来するも、近代には大阪の実業家・藤田傳三郎（香雪斎、1841～1912）の所蔵となった¹。傳三郎はこの大名物の幾重にも及び収納箱に鑑蔵印を貼り込めて愛蔵した。しかし、1937年4月13日の売立²で藤田家から流失し、戦後に穎川徳助の蔵するところとなった。

同じく穎川コレクションを代表する茶道具、長次郎作《赤楽茶碗 銘 無一物》（桃山時代、16世紀、重要文化財）は、大名茶人・松平不昧が所持し、永く松平家に伝えられてきたが、1934年に、原富太郎（三溪、1868～1939）が3万円という高額で購入した³。三溪は、禅宗第六祖・慧能の語「本来無一物」を具現化したようなこの茶碗の造形に魅了され、手もとに置きたいと願ったのだろう。千利休の美意識は、近代の数寄者の目にも適ったのである。

傍ら、梅舒適コレクションで紹介した呉昌碩作品は、19世紀から20世紀に

かけての書・画・篆刻で、個々の作品の来歴調査はこれからの課題である。梅コレクションの呉昌碩作品は150点を超えると目され、受贈記念展では展示できなかったものも多く、いずれ公開の機会を持ちたいと考えている。これらに加えて、呉昌碩と直接交流のあった実業家・吉井民三郎の資料が含まれているのは特筆すべきことである。吉井民三郎旧蔵資料は、1992年10月の『思文閣古書資料目録』第132号に掲載され、梅舒適の手中に落ちた⁴。呉昌碩研究に情熱を傾けていた梅舒適にとって、呉昌碩と親交が深かった吉井の資料を入手できたことは無上の喜びであったことに違いない。

穎川コレクション、梅舒適コレクションは、戦後の個人コレクターが精選・収集した良質かつ学術的な価値の高いコレクションである。これらが散逸することなく、一括して兵庫県に寄贈されたことは奇跡としか言いようがない。最後に、本記念展を開催するにあたって、両コレクションの関係者各位、特別のご高配を賜った関係各企業、財団、個人のみなさまに心より御礼申し上げます。次第である。

（かしわぎ・ともこ／当館学芸員）



会場風景

1 矢野環「名物茶入物語①」[なごみ]（淡文社、2007年）。
2 『香雪斎蔵品展覧図録』（1937年）には、「大名物 唐物勢高茶入」とある。
3 齋藤清「原三溪 偉大な茶人の知られざる真相」（淡文社、2014年）。
4 松村茂樹「呉昌碩と日本人土」（大妻女子大学人間生活文化研究所、2019年）。

「コシノヒロコ展」関連事業

コシノヒロコ展では、盛りだくさんのイベントを開催しました。ただし4月25日（日）に出された緊急事態宣言を受けて、宣言の発出日から5月11日（火）まで臨時休館となったため、各スケジュールの日程延期と「ミュージアム・ボランティアによる解説会」の中止を余儀なくされました。

多彩なゲストとコシノヒロコ氏との対談「トークショー“未来へ”」全4回の、実際の開催日と内容は次の通りです。

(1) 4月11日（日）コシノ三姉妹。ヒロコ氏とジュンコ氏が登壇、ミチコ氏はロンドン在住で来日がかねわず、代わりにビデオレターを寄せてくださいました。

(2) 5月30日（日）赤星憲広氏（元阪神タイガース・野球解説者）

(3) 6月13日（日）中谷彰宏氏（作家）

(4) 6月18日（金）横山幸雄氏（ピアニスト）

ファッションショー「GET YOUR STYLE!」は6月5日（土）6日（日）へと日程変更し、ギャラリー棟3階の回廊を舞台に開催されました。一般公募で選ばれたモデルの方々が、長いランウェイを歩きました。また「2020年春夏コレクションができるまで」を4月16日（金）17日（土）18日（日）、5月14日（金）15日（土）16日（日）、6月18日（金）19日（土）20日（日）、ミュージアムホールで上映しました。いずれも、さまざまな感染症対策を講じながらの実施となりました。日時変更に快く応じてくださった関係者と、参加してくださった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

（鈴木慈子／当館学芸員）



コシノ三姉妹トークの様子 撮影・佐藤昌也 October studios

千宗屋氏講演会

6月27日（日）、「穎川コレクション・梅舒適コレクション受贈記念展」の関連イベントとして、記念講演会「無一物、三保の松原図に見る日本中世の美」(KEN-VI文化セミナー)が開催されました。講師は武者小路千家 家元後嗣・千宗屋氏。当初は5月23日に予定されていたものが、緊急事態宣言の延長により、日程が変更されての開催となりました。100名以上にご参加をいただき、一定の距離を保ちながらも熱気にあふれた90分間となりました。

講演では、穎川コレクションの長次郎《赤楽茶碗 銘 無一物》と伝能阿弥《三保松原図》についてお話いただきました。《無一物》については、実際に手にとった感覚を当時の写真とともにご紹介いただき、「身体と一体化する」という《無一物》に込められた精神性とその造形に、聴衆の心は一気に引き込まれます。続いての《三保松原図》は、千宗屋氏がご自身の修士論文でも取り上げられた思入れのある作品。その伝承筆者や揮毫時の背景に関する濃密な考察には、執筆者もメモを取る手が止まりませんでした。

この度の受贈により、多くの古美術作品を収蔵することになった兵庫県立美術館。千宗屋氏によるご講演によって、その新たな1ページに更なる彩りが加わりました。

（剣持翔伍／当館学芸員）



千宗屋氏講演会の様子

常設展示室6のリニューアル

「穎川コレクション・梅舒適コレクション受贈記念展」の会場となっている常設展示室6は、今年

の1月より休止し、壁面ケース内のクロス張り替えや照

明器具の交換といったリニューアル工事を行いました。照明のリニューアルでは、独立展示ケースを除いた展示室内すべての照明がLED化されました。

美術館の展示室照明の重要な条件の一つに「高演色性であること」というものがあります。演色性とは、人工光源による色の再現性を表す指標のことで、ある人工光源がモノの色をどこまで自然に近い色で見せることが出来るのかを表すものです。今回新たに交換された照明は壁面ケース内のベースライト、天井スポットライトともに可視光域内の様々な色に関して高演色のものとなっており、照明効果の高いものです。

リニューアル後の常設展示室6での最初の展示となった「穎川コレクション・梅舒適コレクション受贈記念展」では、展示物の多くが紙を支持体としたもので、作品保護のために低照度で作品を照らしています。そのような低照度の、つまり暗い中で細やかな色使いを見分けるためには、演色性の高い照明が必須となります。今回リニューアルされた照明はその条件を十二分に満たすものです。

現在（2021年5月現在）緊急事態宣言中でもあり、手放しに兵庫県立美術館へ来てください!とは言えませんが、安心して外出できるようになりましたらぜひお越しいただき、常設展示室6の照明の美しさとその照明に照らされた作品がどう見えるのか心ゆくまでお楽しみいただけます。近いうちにそんな日が来ることを切に願っています。

※照明リニューアルに際して京セラ株式会社より照明器具のご寄贈、技術協力をいただきました。

（岩松智義／当館学芸員）

編集後記

●本号に記事を寄せた学芸員の柏木、剣持（今年4月に着任）、岩松の3名は、アートランブル初登場です。今年度からは、安永幸史と尾崎登志子の二人も加わりました。また小野尚子が横尾忠則現代美術館へ、同館の林優が兵庫県立美術館へと異動になりました。次号以降、新メンバーも順次、執筆予定です。

●表紙、特別寄稿、ショートエッセイで紹介している2つのコレクションによって、館蔵品の幅がぐっと広がりました。穎川コレクションの伝馬遠《高士観画图》（6ページ上の図版の、一番右の作品）が、LEDライトに照らされて展示されているのを見たとき、当館の新たな展開を実感しました。（鈴木）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.71

2021年7月30日発行
編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073

神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷：ウニスガ印刷株式会社

「視覚に頼らない鑑賞サポートツール」 製作検討会に参加して

江上ゆか

美術館の周縁

昨年度の後半、国立国際美術館で行われた「視覚に頼らない鑑賞サポートツール」の製作検討会に、縁あって参加した。

発端は2019年秋に遡る。同館が近年収蔵したアルベルト・ジャコメッティの彫刻《ヤナイハラI》の初展示にあわせ、「視覚を超えた鑑賞探究ワークショップ」なる催しが開かれた。視覚に障がいのある人とない人が一緒に鑑賞を深めるという2日がかりのプログラムで、3Dスキャンデータをもとに製作したレプリカも活用された¹。翌2020年秋、参加者の幾人かに、企画者の藤吉祐子主任研究員より、新たな試みへのお誘いが届く。このレプリカのさらなる活用方法を探るとともに、絵画の所蔵品についても視覚によらない鑑賞をサポートするツールを検討したいという。メンバーは視覚障がい当事者をはじめ、支援学校の教諭や美術館職員など10名弱。新型コロナウイルス感染症拡大の波間を縫って、年度末までに計4回集まり、主にジョアン・ミロ《無垢の笑い》の鑑賞サポートツールについて検討した。

取組み全体については、いずれ国際美術館による報告があるだろう。ここでは筆者の立場から場面を絞って記したい。

最も印象に残っているのは、中途障がいのKさんが触図の試作品に発した「あ、これ、苦手なやつだ」という率直な感想だ。

触図とは指先で触れて理解できるよう凹凸をつけた図である。読み解くには点字以上に習熟が必要とされ、中途障がい者の多くは必ずしも得意でない²。従って触図の作成と提供にはユーザーの、いわば触る技術差への配慮が欠かせない。

Kさんの実感のこもった発言からは、鑑賞の場でややこしい触図をうっかり提供するとどうなるかが、ありありと想像された。視覚に障がいがあっても絵が楽しめるという事前の期待が大きければ、触図が読み解けなかった時の苛立ちや失望は一層大きいただろう。鑑賞をサポートするはずの触図がかえって苦手意識を強め、美術館から足を遠ざける原因にさえなりかねない。

筆者がそもそも2019年の催しに参加したのは、自館事業の参考にもなると考えたからだ。兵庫県立美術館では年に1回、常設展示室で「美術の中のかたち」一手で見える造形」という小企画展を開いている。1989年から続くシリーズで、本誌が刊行される頃にはちょうど第31回が始まっているはずだ³。同展では、視覚に障がいのある人もない人も、手で触れるという方法で作品を鑑賞する。一見、非常に平等な設定だが、その実、触る技術差という問題はほぼ棚上げされてきた⁴。本来は触る鑑賞をサポートするツールや活動まで実現できてこそ、十分に合理的な配慮と言えるだろう。

触る鑑賞をサポートするとして、では具体的にはどのようなアプローチが適切か。おそらく作品それぞれに違うはずで、ともかく「やってみる」しかないだろう。

4度の会合を通じ最も盛り上がったのは、実寸大のツールを試した時だった。《無垢の笑い》は、640枚の陶板から成る縦5m、横12mもの大作で、元々は大阪万博のガスパビリオンのために作られたという。現在は国際美術館の地階展示室へ下りるエスカレーター横の吹き抜け壁面に設置されている。

美術館が用意したツールは、模造紙を作品の大きさにつなぎ、絵柄を触感の違う素材でざっくり置き換え示した、触る絵地図のようなもの。あまりの大きさゆえ、絵地図はごく端の一部しかない状態だった。それでも参加者一同、視覚障がいの有無や程度に関わらず、大興奮で触ることに没頭した。紙の端から端まで歩き、腕を目いっぱい伸ばして線をたどることで、作品のスケールや大画面に踊る描線のパワーが凄まじい説得力で体感された。それは、遠くエスカレーター越しに眺めては決して得られない作品体験だった。

(えがみ・ゆか／当館学芸員)

- 1 詳しくは伊藤亜紗「ヤナイハラ」の背中で迷う」『国立国際美術館ニュース』237号、2020年4月、4頁および拙稿「先生」の背骨」同5頁を参照。
- 2 広瀬浩二郎「視覚障害者の絵画鑑賞—「副触図」の可能性」『民博通信』No.161、2018年、20頁。
- 3 「東影智裕展 触知の森」7月17日～9月26日。第30回までの概要は橋本こずえ「2017年度「美術の中のかたち」展を振り返る」末尾の展覧会記録を参照。『兵庫県立美術館研究紀要』14号、2020年3月、51-54頁。
- 4 ただし2016年度に広瀬浩二郎氏を迎えて開催された「つなぐ×つむ×つかむ：無視覚流鑑賞の極意」はこの問題にも深く関わる例だったと言える。また、触る技術差とは別の問題意識により、結果的に技術差が問題になりにくい出品作が選択されていたケースも複数ある。



実寸大試作品の検証(左:筆者撮影、右:国立国際美術館提供)